

Title	初級文法・語彙教育から見た漢字教材の分析 : 付属教材としての有効性
Author(s)	川口さち子
Citation	聖学院大学論叢, 21(2): 189-202
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=929
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

初級文法・語彙教育から見た漢字教材の分析

— 付属教材としての有効性 —

川 口 さち子

An Analysis of Kanji Textbooks from the Viewpoint of Grammar and Vocabulary
Education at the Elementary Level of JFL/JSL Japanese:
----On Their Effectiveness as Supplementary Teaching/Learning Materials

Sachiko KAWAGUCHI

This essay discusses what kind of supplementary kanji material is effective in a course of elementary Japanese as JFL/JSL. The introduction and order of 284 basic kanji in supplementary material for the textbook *Gogaku Ryugakusei no Tame no Nihongo I & II* (2003) was examined closely in order to find out if they are rational and effective for the teaching of elementary grammar and vocabulary. Analysis of the “contextualization” of the kanji introduced revealed that the order of introduction of the kanji was largely inappropriate and consequently doesn't help teachers/learners teach/learn kanji effectively when the supplementary material is given to be learned along with the main textbook. The result of this analysis also shows that the kanji material fails to give teachers/learners an opportunity to demonstrate their knowledge of the complicated relationship between grammar and orthography due to lack of careful consideration of the use of kanji in the Japanese language.

Key words: Kanji Textbooks, Supplementary Teaching/Learning Material, Introduction and order of kanji, Contextualization, Elementary grammar and vocabulary education

1. はじめに

漢字は、その量の多さと読みの複雑さから、外国語あるいは第二言語としての日本語教育〔以下、「日本語教育」と総称。「日本語」も同様〕において敬語と並んで学習が困難とされているものの一つである。これは、母語の表記のほとんどが漢字である中国語母語話者にとっても言えることなので、漢字をまったく表記体系に持たない他の言語の母語話者にとっては、最大の学習上のチャレン

ジである。そのため、近年、非母語話者日本語学習者のための漢字学習教材が数多く売り出されており、専門書店の日本語教材リスト最新版¹の「表記（かな・漢字）教材」のページには、71の漢字教材が紹介されている。このうち、7種類はメイン教材になる2種類の総合教科書の副教材として編集されたものだが、そのほかは独立した漢字教材である。ただし、総合教科書で漢字の付属教材を備えているものが、このページには紹介されていないので、実際には副教材型の漢字教材はもう少し多くなるであろう。

ところが、副教材型の漢字教材の中には、教科書に登場する語彙の提出順とは直接の関係を持たずに漢字を配列しているものがある。つまり、副教材でありながら、独立型の漢字教材を付属教材にしているような形になっているのである。初級の非漢字圏学習者にとっては、教科書で学ぶ語彙の漢字表記が漢字教材で学べると、学習の負担も少なく、効率的な学習が可能になる。付属教材ながら、独立型の漢字教材は、学習者の語彙習得をどのくらいサポートしているのであろうか。

本稿は、このようなタイプの初級総合教科書の付属漢字教材を取り上げ、その漢字の配列順が、主教材の文法・句型学習が要請する語彙群の表記を可能にするような配列になっているかということ、初級の文法・語彙学習の観点から検証する。これによって、初級段階における文法・語彙学習としての漢字教育のありかたについて、筆者の考えを明らかにしようとするものである。

2. 分析対象の教材

本稿で分析の対象とする総合教科書の選定について説明する。本稿で漢字教材分析用の総合教科書として選んだものは、『語学留学生のための日本語』I・II（初版2002・凡人社）である。この教科書を選んだ理由は、①いわゆる「文法積み上げ式」の教科書で、一般的に初級で扱われる文法事項がほどよくカバーされており、②発行年が比較的新しく、③かつ、付属の漢字教材があるということである。①の理由では、現在多くの機関で利用されている『みんなの日本語 初級』I・II（初版1998・スリーエーネットワーク）が最適だが、この教科書は付属の漢字教材を2種類²持っており、総合教科書と漢字教材の間に関連性が見られるので、付属の漢字教材が独立型教材に近い場合には、主教材の語彙学習にどれほど有意義かという本稿の研究目的にあわない。そこで、『語学留学生のための日本語』（以下、『留学生』と略称）を選んだのである。

3. 主教材の進度と語彙

本稿で仮に主教材として定めた『留学生』の進度を考えてみよう。この教科書は、全40課なので、一学期15週間で終わらせようとする、1週間に五日間で2.6コマ以上進めばいいことになる。そこで、最初の10週間は週に3課、続く5週間は週に2課として40課終えることにすると、週ごとの

進度の分担³は以下表1のようになるだろう。

なお、表中右欄の「主要漢字表記語彙群」は、教科書各課の「新しいことば」というページにあるものをできるだけ多く、そのまま転載するように心がけた。

表1

週	学習する課	主要文法事項	主要漢字表記語彙群
第1週	第1・2・3課	～ハ/モ～ダ [デス]・N のN・コソアド・疑問詞・ ～カラ～マデ・イ/ナ形容 詞+N・時間・数字	職業名・国名・人名・電話番号・住所・日常 雑貨(本・新聞・雑誌・時計・靴)・～円・施 設名(教室・図書室・事務室・食堂・部屋・ 階段等)・～階・町
第2週	第4・5・6課	時制・形容詞文型・動詞(移 動自動詞・二項他動詞)マス 形 ⁴ 文型・手段のデ・協 働のト・全否定のモ・程度 副詞・頻度の副詞・[文ガ 文]・[文。ソレカラ文]・ 誘い表現	場所(喫茶店・会社・銀行等)・時間・曜日・週・ 乗り物(新幹線・地下鉄・電車・自転車等)・ 活動名詞(仕事・宿題・掃除・洗濯等)・対象 物(茶・音楽・手紙・酒等)・形容詞類 ⁵ (暑・ 寒・高・安・遠・近・元気・便利・親切等)・ 移動自動詞(行・来・帰)・二項他動詞(食・飲・ 見・読・書・買・聞・吸)
第3週	第7・8・9課	二項他動詞・形容詞過去形 文型・存在/所有文型・数 量文型・対比のハ・カラに よる因果表現・好キ/嫌イ・ 上手/下手・月日・助数詞・ 数量文型	親族名称(父・母・兄・弟・姉・妹・娘・息子)・ 季節名(春・夏・秋・冬)・位置名詞(上・下・ 前・後・左・右・中・外)・月日・助数詞・そ 他の名詞(恋人・誕生日・結婚式・給料・ 奨学金・書類等)二項他動詞(授受動詞:貸・ 借・教・習・送)・感情感覚形容詞(痛・楽・痛)・ 上手・下手
第4週	第10・11・12課	ホシイ・[動詞マス形タイ] 文型・動詞テ形 ⁶ ・VテV・ VテカラV・Vテイル(進 行/状態)・依頼表現・指 示表現・申し出表現・許可 表現・移動目的のニ	名詞(雨・弁当・山・祭り・空港・買い物・ 忘れ物・大学・専門学校・写真・塩・電気) 頻度副詞(いつも・毎～)動作性名詞 ⁷ (食事・ 散歩)・形容詞類(有名)・動詞(泳・迎・取・ 話・持・待・呼・手伝・消・曲・出・入・使・ 開・閉等)
第5週	第13・14・15課	動詞ナイ形 ⁸ ・動詞辞書形 ⁹ ・ 動詞タ形・VナイデV・禁 止表現・当為表現・[V辞書 形+ノ/コト]文型・Vタ コトガアル・先後表現	名詞(葉・砂糖・～語・映画・釣り・料理等)・ 形容詞類(好・速・遅)・動作性名詞(帰国・ 復習・体操・準備・旅行・見学・病気等)・動 詞(脱・言・忘・歩・走・捨・寝・集・弾・浴・ 登・乗・降等)
第6週	第16・17・18課	普通形文 ¹⁰ ・[普通形ノダ] 文型・普通形文の連体修飾・ [Sトキ]文型・普通形文 ト思ウ/言ウ・普通形文カ /カドウカ聞ク・同格の ¹¹ ・ 依頼表現の事情説明	身体部位名詞(頭・耳・鼻・口・目・髪・手・ 足・背中・お尻・指・爪・胸・首・顔)・その 他の名詞(図書館・歌舞伎・人形・両親・友 だち・教科書・熱・鼻水・鼻血・食欲・物価・ 着物・晴・曇・風・雪等)・形容詞類(大切・眠・ 寂・立派等)・動詞(死・直・泣・笑・怒・思・ 答・着・生・返等)

初級文法・語彙教育から見た漢字教材の分析

第7週	第19・20・21課	動詞可能形・[動詞辞書形コトガデキル] 文型・比較文型・[NハNガ] 文型・仮定条件文型・既定条件文型・譲歩文型	名詞(川・鳥・音・火事・建物・交通・背・体・肉・試合・花見・花火・海外等)・形容詞類(辛・多・少・若・幸) 動作性名詞(説明・合格・乾杯・卒業等)・動詞(飛・覚・勝・敗・太・働・治・見える・聞こえる・分かる等)
第8週	第22・23・24課	様態のソウダ・自動詞/他動詞・自動詞テイル・変化表現(普通形句ヨウニナル・普通形句ナクナルを含む)・トによる条件表現・推量表現(普通形句ダロウ・カモシレナイ)	名詞(機械・凶・字・台所・氷・木の葉・みそ汁・農村・自然・気温・駅前・着物姿・切符・工場・費用・橋・汗等)・形容詞類(悲・明・暗・軽)・動作性名詞(診察・外食・一泊・日帰り・不足等)・動詞(考・間違・咲・焼・落・残・止・並・始・渡・困等)
第9週	第25・26・27課	動詞意向形・意向表現(動詞意向形ト思ウ・動詞辞書形ツモリダ)・累加表現(普通形句シ・普通形句シ)・ノデ/デによる因果表現・補助動詞(Vテアル/オク/シマウ/ミル/イク/クル)	名詞(人気・歌手・生徒・場所・値段・品物・お客・大勢・文化・母国語・～学・玄関・本棚・手帳・漢字・庭・将来等)・形容詞類(安全)・動作性名詞(故障・残業・練習・研究・予約・注意・就職・入学等)・動詞(建・引越・喜・貼・干・植・暖・冷・戻・割等)・副詞類(少々・お互いに・全部)
第10週	第28・29・30課	授受の補助動詞(Vテアゲル/モラウ/クレル/ヤル)・その敬語形・依頼表現・希望表現(Vテホシイ/モライタイ)・タ形による助言表現(Vタライイ・Vタハウガイイ)・Vタママ・変化の副詞	職位名(大統領・首相・知事・市長・校長・会長・社長・部長・課長・店長等)・名詞(同僚・お年寄り・後輩・数学・説明書・調子・色・袋・商品・健康・問題・貯金・寺・神社・城・小学校・教会等)・動作性名詞(紹介等)・動詞(連・渡・抱・確・変・増・減等)・副詞類(絶対に・必ず・次第に)
第11週	第31・32課	バによる条件表現・バによる助言表現・[～バ～ホド] 文型・[～タメニ] 文型・[～ヨウニ] 文型・動詞辞書形ノニ(使ウ・役立つ等)	名詞(市場・運転免許・山登り・窓口・約束・平日・商社・意味・情報・語学・建築等)・形容詞類(新鮮・都合がいい・必要)・動作性名詞(中止・保存・遅刻・世話等)・動詞(通・守・迷・揚等)
第12週	第33・34課	受身文型(直接・間接・非情・自動詞受身)[～トコロダ] 文型・動詞タ形バカリダ	名詞(記事・案内書・米・麦・蜂・宝石・国際会議・卒業式・電球・天皇・大仏等)・動作性名詞(相談・反対・招待・発売・発見・発明・利用・制作等)・動詞(受取・拭・着替・運・叱・助・叩・盗・踏・刺・愛・壊・行等)
第13週	第35・36課	使役文型(強制・許可)・伝聞のソウダ・様態のヨウダ・比況のヨウダ・推測の副詞(ドウモ)・比況の副詞(マルデ)	地方名(北海道・東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州・沖縄)・名詞(捜査・犯人・被害者・調査・傘・平均寿命・天気予報・迷子・留守・女優・高速道路・監督・選手・母親・部下・記録・結果等)・形容詞類(楽)・動作性名詞(競走・安心・暗記)・動詞(投・打)・副詞類(急に)

第14週	第37・38課	使役受身文型・使役ナイデクレ・使役テモラエナイカ・動詞命令形／禁止形・[～トイウ] 文型・～ト言ウ／書イテアル・	名詞（指輪・芝生・楽器・尺八・笛・竹・改札口・非常口・初詣で・梅雨）・形容詞類（苦手・正・危険）・動作性名詞（発表・挨拶・転職）・動詞（歌・走・選・折・包・変）
第15週	第39・40課	尊敬語・謙譲語・丁重語 ¹² ・Vサセテイタダク	名詞（秘書・応接室・出欠・お客様・経営方針・報告書・会場・氏名・～か国語・招待状・寮・半分・新入生・奥様・お礼・友人・お先）・動作性名詞（報告・進学・経験・失礼）・動詞（預・過）

一見して了解できるように、本教科書の語彙は漢字の文字体系については、ほとんど考慮しているとは思えず、あくまでも各課の文型・文法項目の導入・練習に都合のいい単語を「新しいことば」に入れていて、その中で漢字表記できるものは、若干の例外を除いて、ことごとく初出で漢字に直して導入している。もちろん、教師や学習者がこの教科書にある漢字をそのまま覚える必要がないと判断すれば、これらの単語類は、語彙としては学習されても、その漢字表記は学ばれないこともあるわけである。

4. 漢字教材の進度と主教材の語彙

では、この教科書の文法・文型の配列順で、表にあるような語彙群が導入されているとき、付属漢字教材は、どのような漢字を提供しているか、見てみよう。この漢字教材は、『留学生』Ⅰ・Ⅱ、それぞれの付属教材『フォローアップ問題集』（以下、『問題集』と略称）の中にあるものである。この問題集には、「初級読解＋漢字編」という副題がついており、内容の構成は「第1章練習問題」「第2章読み物」「第3章漢字」となっている¹³。漢字教材は、この第3章にあり、『問題集〔Ⅰ〕』には、1課から10課までに、だいたい各課10字程度、計103字の漢字が導入されている。一方、『問題集〔Ⅱ〕』には、11課～27課までの17課に、各課10字か11字、計181の漢字が導入されている。したがって、この『問題集』全体で284字の漢字が導入されていることになる。

漢字教材が27課構成の場合、15週間の学期中には一週間に2課進めば、最終週を待たずに漢字教材を終わらせることができる。そこで、前章で作成した、教科書の進度表にこの『問題集』のある漢字を、週に2課の進度で組み入れてみる。ただし、漢字教材の2課に含まれている曜日の漢字が、主教材では第2週目に導入されることから、第1週目は漢字教材も1課のみとし、そのあと週に2課ずつ導入する進度で、第14週目で、『問題集』による漢字導入を終了するという進度で進めば、全体のシラバスは表2のようになる。

表 2

週	漢字教材の進度	主要文法事項	主要漢字表記語彙群
第1週	1課：数 一・二・三・四・五・ 六・七・八・九・十	～ハ/モ～ダ [デス]・N のN・コソアド・疑問詞・ ～カラ～マデ・イ/ナ形容 詞+N・時間・数字 (1～ 10.000))	職業名・国名・人名・電話番号・住所・ 日常雑貨 (本・新聞・雑誌・時計・靴)・ ～円・施設名 (教室・図書室・事務室・ 食堂・部屋・階段等)・～階・町
第2週	2課：数・よう日 百・千・万・日・月・ 火・水・木・金・土 3課：人 人・子・女・男・先・ 生・学・友・父・母	時制・形容詞文型・動詞 (移 動自動詞・二項他動詞) 文 型・手段のデ・協働のト・ 全否定のモ・程度副詞・類 度の副詞・[文ガ、文]・[文。 ソレカラ文・誘い表現	場所 (喫茶店・会社・銀行等)・時間・曜 日・週・乗り物 (新幹線・地下鉄・電車・ 自転車等)・動作性名詞 (仕事・宿題・掃 除・洗濯等)・対象物 (茶・音楽・手紙・ 酒等)・形容詞類 (暑・寒・高・安・遠・近・ 元気・便利・親切等)・移動自動詞 (行・来・ 帰)・二項他動詞 (食・飲・見・読・書・買・ 聞・吸)
第3週	4課：上・下など 上・下・中・外・左 右・東・西・南・北 5課：山・川など 山・川・車・雨・電・ 名・前・本・何・語	三項他動詞・形容詞完了形 文型・存在/所有文型・数 量文型・対比のハ・カラに よる因果表現・好キ/嫌イ・ 上手/下手・月日・助数詞・ 数量文型	親族名称 (父・母・兄・弟・姉・妹・娘・ 息子)・季節名 (春・夏・秋・冬)・位置 名詞 (上・下・前・後・左・右・中・外)・ 月日・助数詞・その他の名詞 (恋人・誕 生日・結婚式・給料・奨学金・書類等) 三項他動詞 (授受動詞：貸・借・教・習・ 送)・感情感覚形容詞 (痛・楽・痛)・上手・ 下手
第4週	6課：形容詞 大・小・白・古・新・ 安・高・多・少・長 7課：時間など 円・年・時・間・分・半・ 今・毎・午・後・週	ホシイ・[Vタイ] 文型・ 動詞テ形・VテV・Vテカ ラV・Vテイル (進行/状 態)・依頼表現・指示表現・ 申し出表現・許可表現・移 動目的のニ	名詞 (雨・弁当・山・祭り・空港・買い物・ 忘れ物・大学・専門学校・写真・塩・電気) 頻度副詞 (いつも・毎～) 動作性名詞 (食 事・散歩)・形容詞類 (有名)・動詞 (泳・ 迎・取・話・持・待・呼・手伝・消・曲・ 出・入・使・開・閉等)
第5週	8課：動詞 行・来・食・言・話・ 読・入・出・聞・書 9課：体の部分など 目・口・耳・手・足・魚・ 鼻・駅・道・店・校	動詞ナイ形・動詞辞書形・ 動詞タ形・VナイデV・禁 止表現・当為表現・[V辞 書形+ノ/コト] 文型・V タコトガアル・先後表現	名詞 (葉・砂糖・～語・映画・釣り・料 理等)・形容詞類 (好・速・遅)・動作性 名詞 (帰国・復習・体操・準備・旅行・ 見学・病気等)・動詞 (脱・言・忘・歩・走・ 捨・寝・集・弾・浴・登・乗・降等)
第6週	10課：動詞など 立・休・飲・見・買・会・ 社・天・気・国・空 11課：田、牛など 田・力・犬・心・牛・物・ 門・開・茶・肉・鳥	普通形文・[普通形ノダ] 文型・普通形文の連体修飾・ [Sトキ] 文型・普通形文 ト思ウ/言ウ・普通形文カ /カドウカ聞ク・同格のノ・ 依頼表現の事情説明	身体部位名詞 (頭・耳・鼻・口・目・髪・ 手・足・背中・お尻・指・爪・胸・首・顔)・ その他の名詞 (図書館・歌舞伎・人形・ 両親・友だち・教科書・熱・鼻水・鼻血・ 食欲・物価・着物・晴・曇・風・雪等)・ 形容詞類 (大切・眠・寂・立派等)・動詞 (死・直・泣・笑・怒・思・答・着・生・ 返等)

<p>第7週</p>	<p>12課：形容詞1 早・広・明・暗・正・ 近・遠・太・重・悪 13課：動詞1 止・引・動・働・洗・思・ 急・持・待・作・教</p>	<p>動詞可能形・[動詞辞書形 コトガデキル] 文型・比較 文型・[NハNガ] 文型・ 仮定条件文型・既定条件文 型・譲歩文型</p>	<p>名詞（川・鳥・音・火事・建物・交通・背・ 体・肉・試合・花見・花火・海外等）・形 容詞類（辛・多・少・若・幸）動作性名 詞（説明・合格・乾杯・卒業等）・動詞（飛・ 覚・勝・敗・太・働・治・見える・聞こ える・分かる等）</p>
<p>第8週</p>	<p>14課：季節, 時間など 夕・方・朝・昼・夜・去・ 春・夏・秋・冬・曜 15課：家族 姉・妹・兄・弟・親・私・ 主・家・族・自・民</p>	<p>様態のソウダ・自動詞/他 動詞・自動詞テイル・変化 表現(普通形句ヨウニナル・ 普通形句ナクナルを含む)・ トによる条件表現・推量表 現(普通形句ダロウ・カモ シレナイ)</p>	<p>名詞（機械・図・字・台所・氷・木の葉・ みそ汁・農村・自然・気温・駅前・着物姿・ 切符・工場・費用・橋・汗等）・形容詞類 （悲・明・暗・軽）・動作性名詞（診察・ 外食・一泊・日帰り・不足等）・動詞（考・ 間違・咲・焼・落・残・止・並・始・渡・ 困等）</p>
<p>第9週</p>	<p>16課：仕事 仕・事・医・者・屋・ 員・銀・歌・運・転 17課：学校1 文・字・回・意・味・ 漢・英・説・勉・強</p>	<p>動詞意向形・意向表現（動 詞意向形ト思ウ・動詞辞書 形ツモリダ）・累加表現（普 通形句シ・普通形句シ）・ ノデ/デによる因果表現・ 補助動詞（Vテアル/オク /シマウ/ミル/イク/ク ル）</p>	<p>名詞（人気・歌手・生徒・場所・値段・ 品物・お客・大勢・文化・母国語・～学・ 玄関・本棚・手帳・漢字・庭・将来等）・ 形容詞類（安全）・動作性名詞（故障・残 業・練習・研究・予約・注意・就職・入 学等）・動詞（建・引越・喜・貼・干・植・ 暖・冷・戻・割等）・副詞類（少々・お互 いに・全部）</p>
<p>第10週</p>	<p>18課：動詞2 歩・走・起・帰・始・ 終・使・借・貸・知・ 着（ツク・キル） 19課：形容詞など 好・有・便・利・不・ 元・切・特・別・同</p>	<p>授受の補助動詞（Vテアゲ ル/モラウ/クレル/ヤ ル）・その敬語形・依頼表現・ 希望表現（Vテホシイ/モ ライタイ）・タ形による助 言表現（Vタライイ・Vタ ホウガイイ）・Vタママ・ 変化の副詞</p>	<p>職位名（大統領・首相・知事・市長・校長・ 会長・社長・部長・課長・店長等）・名詞 （同僚・お年寄り・後輩・数学・説明書・ 調子・色・袋・商品・健康・問題・貯金・ 寺・神社・城・小学校・教会等）・動作性 名詞（紹介等）・動詞（連・渡・抱・確・変・ 増・減等）・副詞類（絶対に・必ず・次第 に）</p>
<p>第11週</p>	<p>20課：住所 住・所・町・市・区・村・ 京・都・県・通・地 21課：建物 病・院・工・場・室・映・ 画・館・図・堂・建</p>	<p>バによる条件表現・バによ る助言表現・[～バ～ホド] 文型・[～タメニ] 文型・[～ ヨウニ] 文型・動詞辞書形 ノニ（使ウ・役立ツ等）</p>	<p>名詞（市場・運転免許・山登り・窓口・ 約束・平日・商社・意味・情報・語学・ 建築等）・形容詞類（新鮮・都合がいい・ 必要）・動作性名詞（中止・保存・遅刻・ 世話等）・動詞（通・守・迷・揚等）</p>
<p>第12週</p>	<p>22課：音、光など 音・光・色・声・風・海・ 遊・池・世・界・旅 23課：動詞3 集・乗・送・進・考・死・ 売・料・理・合・計</p>	<p>受身文型（直接・間接・非 情・自動詞受身）[～トコ ロダ] 文型・動詞タ形バカ リダ</p>	<p>名詞（記事・案内書・米・麦・蜂・宝石・ 国際会議・卒業式・電球・天皇・大仏等）・ 動作性名詞（相談・反対・招待・発売・ 発見・発明・利用・制作等）・動詞（受取・ 拭・着替・運・叱・助・叩・盗・踏・刺・ 愛・壊・行等）</p>

第13週	24課：形容詞 2 青・赤・黒・楽・暑・寒・低・軽・短・弱 25課：学校 2 質・問・答・練・習・注・試・験・研・究・題	使役文型（強制・許可）・伝聞のソウダ・様態のヨウダ・比況のヨウダ・推測の副詞（ドウモ）・比況の副詞（マルデ）	地方名（北海道・東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州・沖縄）・名詞（捜査・犯人・被害者・調査・傘・平均寿命・天気予報・迷子・留守・女優・高速道路・監督・選手・母親・部下・記録・結果等）・形容詞類（楽）・動作性名詞（競走・安心・暗記）・動詞（投・打）・副詞類（急に）
第14週	26課：生活 品・紙・洋・服・菓・写・真・野・菜・飯・台 27課：その他 体・顔・首・頭・代・用・度・産・業・以・発	使役受身文型・使役ナイデクレ・使役テモラエナイカ・動詞命令形／禁止形・[～トイウ] 文型・～ト言ウ／書イテアル	名詞（指輪・芝生・楽器・尺八・笛・竹・改札口・非常口・初詣で・梅雨）・形容詞類（苦手・正・危険）・動作性名詞（発表・挨拶・転職）・動詞（歌・走・選・折・包・変）
第15週		尊敬語・謙讓語・丁寧語・Vサセテイタダク	名詞（秘書・応接室・出欠・お客様・経営方針・報告書・会場・氏名・～か国語・招待状・寮・半分・新入生・奥様・お礼・友人・お先）・動作性名詞（報告・進学・経験・失礼）・動詞（預・過）

ご覧のように、『問題集』の漢字教材は、内容別にタイトルをつけて分けられており、漢字の成り立ちや部首の構成によってではなく、同じ下位概念に所属する単語を表記できる漢字を集めて教材の課を作っており、どういう編集方針であったかが「前書き」にも書かれていない¹⁴ので、確認のしようがないのではあるが、始めから語彙教育を意識して編集されたものだという事は類推できる。次の章では、この語彙的なまとまりと主教材の学習項目との関係を考察する。

5. 漢字教材と主教材の関係

本章では、週単位の漢字教材の内容を、同じ週およびその前後の週の主教材の学習項目の進捗との関係で検討し、それが学習者の語彙習得をどの程度サポートするかを考察してみる。すると、いろいろな問題が見えてくるので、それらの問題を「語彙教育から見た問題」と「文法教育から見た問題」に分けて、以下それぞれに論ずる。

5-1. 語彙教育から見た問題

主教材と漢字教材の関係を、漢字初導入の第1週から見てみよう。ここでの漢字教材1課の内容は数字の「一」から「十」までなので、同じ週に学習する数字の復習にもなり、項目としては妥当であると言える。その意味では、第2週の漢字2課も数字と曜日を表記できる漢字を含み、前週と同じ週の復習にもなる。また、「人」を表す漢字が紹介されていることで前週までの語彙復習をサポー

トできる。漢字教材の進度が、主教材のそれとの間で、このような関係になっていることが、語彙教育のサポートに上で重要なのである。一方、同じ漢字3課の「父・母」は主教材では第3週の導入なので、漢字3課ではなく、4課に回したほうがいい。ついでに、4課を見ると、同じ週に「存在表現」が学習項目になっているので、「上・下…南・北」の導入は妥当である。しかし同じ週に親族名称の名詞が入ってきていることから、前述の「父・母」を含め、「兄・弟・姉・妹」もまとめて導入したいところである。しかし、「兄・弟・姉・妹」は、第8週の漢字15課まで登場しないのは不都合である。せめて第3週か第4週にあると語彙学習上好都合であるため、親族名称の漢字をまとめて漢字5課か6課へ移したほうがよいのではないだろうか。一方、3課に戻ると、内容が「人」関係の漢字なので、「父・母」を除いてこれを2課とすれば、主教材の学習内容とも一致するため、第1週から導入できることになる。漢字の提出順が主教材の語彙教育をサポートするのは、このような考え方をすることなのであるが、『問題集』の筆者たちは、このあたりの設計が十分にできていないように見える。

漢字教材の漢字は、特定の意味のまとまりでくくられていることが多いので、次にそのまとまりでの配置が適正かどうか見てみよう。ただし、動詞・形容詞類については、次節の「文法教育から見た問題」で扱うので、名詞概念の漢字が中心の課のみに話題を絞ると、次のようなものが考察の対象になるので、一つずつ検討していく。

◇第4週漢字7課（時間など）：円・年・時・間・分・半・今・毎・午・後・週

⇒第2週が主教材3課の「時間」で、その後主教材では5課・6課・7課・8課と、動詞・形容詞類の時制概念導入が続くため、第4週でもそれほど遅くはないが、第2週から第3週の導入が望ましい。

◇第5週漢字8課（体の部分など）：目・口・耳・手・足・魚・鼻・駅・道・店・校

⇒主教材で身体部位の名称が「新しいことば」に入っているのは、第3週主教材3課の「形容詞完了形」のところで、「頭が痛かったです」の文で使われるためだが、まず肝心の「頭」が漢字第8課ではなく27課と漢字の最後の課にあり、また「～が痛かったです」の文型では「目・口・耳」は使いにくい。そこで、漢字27課から「頭・体・顔・首」を移し、「髪・背（中）」等も加えて身体部位名称として一課とし、主教材20課の「ワンさんは頭がいい／髪が短いです」の文型練習に使えるように、この文型が導入される第7週へ移すのが適切である。

◇第8週漢字14課（季節、時間など）：夕・方・朝・昼・夜・去・春・夏・秋・冬・曜

⇒まず、「曜」は、「日～土」が導入されている第2週漢字2課にあるべきだろう。画数が多い漢字なのであとに回したというのかもしれないが、この漢字を導入しないならば「曜日」は「ようび」と平仮名表記に統一すべきで、「よう日」のような中途半端な表記にならないように注意しなければならない。それを気にして第8週まで「ようび」で通すより、第2週で導入したほうがいいだろう。「去」も「去年」のほかに初級で使える漢字ではないので、「年」のある漢

字7課に入れて、前述したとおり、第2週か第3週に持っていくべきだ。「春・夏・秋・冬」は、主教材の初出は8課の「形容詞完了形」だが、このあたりは他の時間表現用の漢字も多いため、学習者の負担を避けるためには、主教材24課「春になると花が咲きます」に使えるように配置したほうがよい。すると、ちょうどこの第8週にあるのが適切となる。

◇第9週漢字16課(仕事)：仕・事・医・者・屋・員・銀・歌・運・転

⇒職業名は、主教材1課の「新しいことば」としていくつか挙がっているが、漢字としては難しい字を使うものが多く、初級課程第1週からの導入は避けたほうがよい。そこで、主教材23課「日本語が上手になりました」で「医者になります」のように使うか、26課「意向表現」で「銀行員になろうと思っています」のように使うかを考えて、第8週か第9週に配するのがよい。前述のように身体部位の「手」が第7週に導入されるなら、「歌手」「運転手」も無理なく表記できる。したがって、漢字教材として16課あたりにあるのは妥当であろう。

◇第9週漢字17課(学校)：文・字・回・意・味・漢・英・説・勉・強

◇第13週漢字25課(学校2)：質・問・答・練・習・注・試・験・研・究・題

⇒ともに「学校」関係だが、漢字17課のものは概念がバラバラである。この「意・勉・強」を漢字25課に移せば、全体が学校で行われる教育・学習活動の概念でまとめられる。そうなれば、これを主教材36課の「使役文型」に、「質問に答えさせます」「試験の前に問題を練習させます」のように使えるので、第13週に配しておくとおおよそよいことになる。漢字17課の残り、「文・字・回・味・漢・英・説」は、「回」を除き、5課の「語」を移し、前述した「意」を一度戻して考えると、主教材38課「[～トイウ]文型」の中に「～は英語で～ということです」「漢字の～は～という意味です」「どういう意味か説明してください」のように使うことができる。よって、これらを「言語、意味」のような概念で一課にまとめ、「[～トイウ]文型」が導入される第14週に持っていけば適切な配置となる。したがって、この課は17課よりもっと後の課とすべきであろう。

◇第11週漢字20課(学校2)：住・所・町・市・区・村・京・都・県・通・地

⇒このような住所を書く作業は、「手紙を書く」というような課題があれば生かされるが、主教材に「手紙の書き方」を学習項目にしている課はない。したがって、漢字教材のこの課は特にここにある必要はなく、削除してしまってもよいし、最後の課として主教材の39課・40課で敬語の導入が終わるのにあわせて、「日本語の先生／学校の事務員／ホームステイ先の家族」などに宛てて、礼状を書くというような練習のときに導入すればよい。

◇第11週漢字21課(建物)：病・院・工・場・室・映・画・館・図・堂・建

⇒建造物についての語彙が使いやすいのは、「存在表現」と「受身」である。「存在表現」は第3週であるが、このあたりは基本的な数・時間・日付、また時節で述べる動詞・形容詞を導入しなければならないので、ここでの導入は避け、「受身」の入っている第12週に持って行って、「こ

の病院は、1930年に建てられました」のような文で使えるようにするのがよい。ただし、そうすると「工場」「図書館」などより「教会」「寺」「城」等のほうが「受身」文型に使いやすい。以上、まとまりのある語彙について、その内容と教材全体での配置を、語彙教育の立場から考えてみた。漢字教材22課「音、光など」、26課「生活」、27課「その他」は、一つの課に集めてある意図があまり明確に見えない。まず、これらの課の所属漢字が初級の語彙教育の中で必要かどうか、必要ならばどういう学習項目として使えるのかを吟味した上で、これらの漢字の扱いを決めなければならぬ。

前述したように、初級語彙教育としての漢字の扱いを見るところは、それらの漢字が主教材の文型や表現のどの部分にちょうどよく使えるかということを考えてみることで、筆者はこれを「語彙としての漢字の文脈化」と呼びたい。この「文脈化」の概念は、川口（2004）の考えを借りたものだが、この中で川口は「文法の文脈化」については詳述しているものの「語彙の文脈化」に関してはほとんど議論していない。そこで、筆者は「漢字の（語彙としての）文脈化」を試みたわけであるが、この概念によって漢字教材と主教材の関係を、語彙教育の観点から詳細に描くことが可能になったと言えよう。

5-2. 文法教育から見た問題

前節では、語彙教育から漢字の導入のあり方を見てみたのだが、本稿の題目のもう一方にある「文法教育からの視点」で漢字指導を考えてみよう。そもそも、漢字を文法の問題として見るというのは、どういうことであろうか。具体例を、第3週の内容から検討してみよう。

前述のように、この週の漢字4課の項目である位置名詞の漢字は、語彙教育上妥当な導入であった。一方、同じ週に漢字5課の「山・川・車・雨・電」があるが、これが主教材との関係上、このあたりに必要なものかどうか疑われる。確かに、第3週に当たる主教材の文法項目に「存在文」があるので、「山の上」「川のちかく」という句も書けるし、前週に「移動自動詞」が学習済みなので、「山に行きます」「川に行きます」という文も表記できるようになるが、実は主教材の「新しいことば」に「山」「雨」があるのは、10課であって第4週の登場であるし、「電」も第4週11課の動詞テ形の導入時の「新しいことば」にあり、「電気を消してください」という文に使われるようになっている。したがって、この時点で導入しなくてもいいかと思われる。むしろ、この段階で「山・川・電…」などよりも大切なのは、すでに前週までで紹介されている「形容詞類（イ形容詞・ナ形容詞）」「移動自動詞」「二項・三項他動詞」という文法的に重要な語彙群を表記できる漢字を導入することである。

なぜこの時点で形容詞類や動詞を表す漢字の導入が大切かという点、まさにこの段階での文法学習の項目が文法と表記の関係をとらえさせるのに、好都合だからである。主教材の進度を見ると、第3週で形容詞の完了形、第4週で動詞テ形、第5週で動詞ナイ形・辞書形・タ形、第6週で普通

形文と、基本的な文法事項が相次いで出てくる。これを表記の面で見ると、例えば、第3週に二項他動詞の一つとして出てくる五段動詞「飲みます」は、第4週のテ形で「飲んで」、第5週のナイ形で「飲まない」、辞書形で「飲む」、タ形で「飲んだ」と形態変化するが、「飲」の表記はっさい変わらない。しかし、だからと言って「飲」を漢字として見た場合、これを「の」と読む日本語母語話者は存在せず、「飲」と書いてあったら訓読みの「ノム」か、音読みの「イン」か、どちらかの読み方しかない。つまり、日本語では「飲」の漢字の意味はそのまま「ノム」として理解しながら、文法上の便宜のために「飲みます／飲んで／飲まない／飲む」という、まるで「飲」を「ノ」としか読まないような表記のしかたをするのである。一段動詞の漢字「食」も同様に「食べます／食べて／食べない／食べる」のように、まるで「食」を「タ」としか読まないような表記を行う。この意味（ノム・タベル）と表記（ノ・タ）の関係は、言語学的に見てたいへん特殊なものであり、もし合理的に考えれば、「飲」も「食」も、それぞれ「飲ます・飲で・飲ない・飲」「食ます・食て・食ない・食」という表記になってもおかしくないくらいである。日本語と同じSOV言語であり、漢字を表記体系の一部に持つ韓国語では、ハングルを漢字の送りがなに使って日本語のような表記をすることはやれば不可能なことではないが、韓国民族は母語の歴史の中でそのような表記を一度たりとも考えたことすらないようである。非漢字圏の学習者が漢字学習の初期の段階でこの文法と表記の複雑な関係に惑わされて、漢字としての「食」を「タの漢字」と言ったりして教師を面食らわせるのは、そのためである。一方、イ形容詞では「暑い／暑くない／暑かった」と活用するため「暑」の部分は「アツ」であり、「あー、暑っ！」というような表記も可能なように、文法と表記の間に動詞のような複雑な関係はない。これがナ形容詞になると、「元気な／元気じゃない／元気だった」のように、「元気」の部分は名詞のように独立して（実際、「元気が出る」では名詞である）、文法変化の表記と意味概念の表記とはそれぞれ独立したものである。

以上のような、文法と表記の関係を確認させるために、第3週から第6週にかけては、多くの動詞・形容詞類を文の中で「漢字で書く」という作業を続けることが、文法教育から見た漢字指導の要点なのである。しかし、第2週で主教材では導入済みの形容詞類を表記する漢字が第4・7・10・13週まで出てこず、しかもバラバラに導入されている。次に、動詞も、第5週に漢字8課「動詞」、第6週に漢字10課「動詞など」、第7週に漢字13課「動詞1」、第10週に漢字18課「動詞2」、第12週に漢字23課「動詞3」と、かなりバラバラに導入され（そのうえ、「動詞1」の前に「動詞」「動詞など」のグループが置かれるという表示の不統一あり）、しかも最初の動詞漢字導入である第5週漢字8課「動詞」では、主教材第6課で「二項動詞マス形」の導入時の「新しいことば」である「飲む」「見る」の漢字は含まれておらず、次の週に回されている。主教材との関係からして、第6週漢字8課の提出漢字は、現行のものに「飲・見」を加え、「出・入」をかわりに漢字10課へ入れるとしてはどうだろうか。

このように、『問題集』の漢字教材は、主教材との進捗の関係で、学習者の語彙学習に対する一

貫した設計がないだけでなく、文法学習をサポートするようにも配列されておらず、副教材としての有効性を疑わざるを得ない。

6. まとめと今後の課題

以上、『留学生』の付属教材『問題集』の中の漢字学習用教材を用いて、その付属教材が主教材の学習項目の教授や習得をサポートするような理念と構成でできているかを、語彙教育・文法教育の観点からそれぞれ検討した。その結果、語彙教育の面からは、提出する漢字が主教材の話題や文法項目との関係で十分に「文脈化」されていないこと、文法教育の面からは、文法と表記の関係が意識されていないため、そのことを学び、あるいは教えるための漢字提出の配列になっていないことが判明した。筆者の次の課題は、ではどのように漢字を配列すれば、主教材の進度に合った漢字提出ができるかを、文法・語彙教育の両面から考え、教材案を提示してみることである。

漢字教育の方法はいくつかあり、漢字の字形の構成と文字としての体系から、象形文字・指示文字・形声文字の順に教えると分かりやすいという議論もあるが、それは必ずしも初級の語彙教育から見てふさわしいかどうか、伊藤（1991）など早くから疑問視する論も見えている。やはり、漢字は初級の文法知識に裏付けられた意味の世界を開く語彙教育の対象として、初級学習の全体の流れの中から考えていかなければならず、そのような研究を可能にするツールとして「文脈化」の考えがあると考えのだが、そのような観点から語彙教育としての漢字指導を論じたものは、管見の及ぶ限りではあるが、ほとんど見られない。

今後も、他の付属教材型漢字教材、独立型漢字教材の特定の教科書との併用の問題など、初級学習段階における効果的な漢字導入のありかたを検証していきたいと考えるものである。

注

- 1 (株) 凡人社『日本語教材リスト』38, 2008～2009年版
- 2 『みんなの日本語初級Ⅰ 漢字』およびその『漢字練習張』, ならびに『みんなの日本語初級Ⅱ 漢字』およびその『漢字練習張』。ともに、2006年(株)スリーエーネットワーク刊
- 3 「文型」については、例えば「わたしは～にNをVられます」「～はVられます」のようには書かずに、「受身」というように一括した名称を与えた。
- 4 「私はコーヒーを飲む」のように、主語(主題)のほかにもう一つの必須補語を持つ他動詞を「二項他動詞」という。日本語教育一般では、その連用形を、そこに丁寧の助動詞のマスが付くことから「マス形」と呼ぶ。
- 5 日本語教育では「イ形容詞」と呼ばれることの多い「形容詞」と、「ナ形容詞」と呼ばれるこの多い「形容動詞」を総称して、本論では便宜上「形容詞類」と呼ぶ。
- 6 動詞の連用形の音便形を、そこに接続助詞のテがつくことから、日本語教育では「テ形」と呼ぶ。ただし、一段動詞・カ変動詞・サ変動詞では、マス形と同形態になる。
- 7 代動詞スルをつけるとそのままサ変動詞になるような、動作的あるいは状態的な様相を示す名詞を、

本論では便宜上「動作性名詞」と呼ぶ。

- 8 動詞の未然形を、そこに形式形容詞のナイがつくことから、日本語教育では「ナイ形」と呼ぶ。ただし、一段動詞・サ変動詞では、マス形と同形態になる。
- 9 動詞の終止形を、その形で辞書の見出し項目になっていることから、日本語教育では「辞書形」と呼ぶ。
- 10 来ル・寒クナイ・キレイジャナカッタのように述語にデスマスの付かない形態を普通形とよび、その形態の述語で終わる「行かなかった」のような文を、本論では便宜上「普通形文」と呼ぶ。
- 11 「留学生のリンさん」のような句における助詞ノを「同格のノ」と呼ぶ。
- 12 話題の人物間の人間関係に言及しない、オル・イタス・マイル・申ス・存ジル・ゴザルのような敬語を「謙譲語」とは分けて、「丁寧語」と呼ぶ。
- 13 ただし、『問題集 [I]』のみ「第4章まとめの問題」(pp.081-088)という項がある。
- 14 「前書き」には『問題集 [I]』の漢字教材所載の漢字が「日本語能力検定試験4級」の出題基準の範囲(103字)であることが述べられているのみである。なお、『問題集 [II]』には「前書き」がなく、所載漢字の典拠は不明である。

【参考文献】

- 伊藤芳照「日本語教育における文字習得」『日本語学』第10巻第3号(1991) 明治書院 pp.31-37
川口義一「学習者のための表現文法—「文脈化」による「働きかける表現」と「語る表現」の教育」『AJALT』国際日本語普及協会(2004) No.27 pp.29-33